

編集後記

特定非営利活動法人アジア近代化研究所の紀要である *e-Magazine* 第21号をお送りします。巻頭言に書きましたように、本号をもってとりあえず *e-Magazine* の発行を終了する予定である。*News Letter* から *e-Magazine* にかけて、掲載した文章への反響もかなりあったので、いまやかなり社会に受け入れられたものと考えます。たとえば、私が書いたインドネシアとの出会いの中で、1965年にスカルノ大統領(当時)が心を込めて、金日成に贈ったとされる金日成花のことを書いた。すると、あるテレビ局から電話があり、そのことをもっと詳しく知りたいので教えてほしい、とのことであった。私自身も見たことがなかったので、満足な答えはできなかったが、その後、北朝鮮は中国の花の展示会には数多く出品していることが分かった。昨年も出品したようである。もはや北朝鮮では珍しい花ではないようだが、残念ながら日本で見ることはできそうもない。

過去10年間の紀要をすべて詳細に記憶しているわけではないが、多くの優れた論文やエッセイ、紹介文などを扱い、一部は『アジア・レポート』として再掲したものもある。それらは、当研究所の名称にアジアと名付けているにもかかわらず、必ずしもアジアの研究者ばかりではなく、また経歴も専門もさまざまな分野にわたる専門家の集団である。その方がより有益と考えたからである。なぜなら、掲載された文章には多岐・多様性、ユニークさがあり、研究会では議論が学際的になるからである。研究所の名称

にアジア近代化とつけた理由の1つは、アジアをはじめとした非西欧社会が経済発展を中心として、近代化していくにつれて、さまざまな変化が生じ、当初は経済が中心であっても、経済発展が進むにつれて社会、政治、文化、伝統などに大きな変化が生まれるのは当然であり、また経済だけを扱うのではアジアはわからないとの前提があるからである。こうして、私自身も専門外の皆さんの文章を読ませていただき、講演会や研究会などを通じて、多くのことを学ばせていただいた。

そういうことで、ここ10年間に多くの文章を公開し、それなりに社会からの反響もあったが、突然、登場した文章が簡単に社会から評価されないことは当然であろう。むしろこれまでの努力は、これから徐々に浸透し、評価が定まっていくと考えるべきであろう。その意味で、今回で終了するのは私自身も大変残念であるが、やむえないこととご理解をいただくしかない。

さて、今回もさまざまな文章を公開することになり、忙しい中、本格的な調査・研究の成果を書いていた執筆者の皆さんには敬意を表したい。詳しい内容はいつもの通り、読者にお任せしたいが、ちょっとだけ触れておこう。嘉数啓教授のバリ島と沖縄の竹富島の比較を通じて観光と文化の変容について考察しておられる。竹富島は、沖縄県の八重山諸島にある小さな島である。それは沖縄県八重山郡竹富町に属している。八重山の中心地である石垣島から、高速船

で10分ほどの距離にある。「竹富」は明治半ばまでは「武富」と表記されていたとのことである。嘉数教授は竹島を例にとって沖縄、ハワイの文化(チャンプルー文化)とバリ島のそれとの文化人類学的な比較考察を行い、文化がいかに観光によって影響されるか、などを詳細に論じており、結論としてクリフォードの言う「文化の生成」、つまり純粹で真正な文化などはなく、文化は常に新たな変化を吸収して「チャンプルー(ごちゃまぜ)」的に創造されるものであるとする意見に賛成しておられる。アジアには経済は近代化しても、それ以外の近代化はゆるさない人々もいる。しかし、いったん経済の近代化を開始すると、経済以外の部分も近代化へと引っぱり、長時間のうちに伝統や文化も変容を迫られる。

嘉数教授の論考は多くの読者にまたとない貴重な知識と視点を提供しているので、ぜひ一読されるようお勧めしたい。日本の伝統文化を守れ、などという意見をしばしば聞く。むろん、日本文化の守るべき部分は守るのは当然であるが、観光客4000万人(日本の人口の約3分の1)を目標とする安倍内閣の政策が成功すれば、ますます日本の伝統文化は大きな影響を受けることになり、文化と観光の関係を見れば、それはそれで当然の成り行きだと考えられる。

嘉数教授の論文以外の論文にも、注目してほしいが、特に童教授の「国際収支の変化から見る中国の課題」、園江満教授の「タイ文化圏から見るラオスの社会と文化—地域と近代の相克—」、および筆者の「腐敗・汚職:

その軽減ないし防止策は何か」、の一読を望みたい。それらの内容の詳細はそれぞれ読者が一読し、理解し、評価していただきたいが、中国の課題を国際収支の面から見た童論文も新鮮だし、同時にタイ文化圏に位置するラオスの社会と文化もこれまで扱ったことのない、新鮮な論考である。特に、園江教授の論文は、本年3月わが研究所の講演会で詳細に論じていただき、多くの参加者に好評を得たもので、特に当日参加できなかった会員の皆さんにはぜひ読んでいただきたい論文である。ラオスに関する、とりわけ社会と文化については知る機会も少ないと思われるだけに、またとない論文と思われる。山田翔氏の「ブラジル共和国ゴイアス州におけるサトウキビ生産のシステムと効率性の分析」は現場での調査報告書である。今後もっと詳細な調査報告書を期待したい。

筆者の腐敗・汚職対策はやや一般的な内容であるが、アジアの腐敗・汚職を考えるうえで、まず知っておくべき基礎的な視点を提供することを目指したものであり、アジアをはじめ、世界の発展途上国にはびこる腐敗や汚職の問題を考えるうえで、何らかの役に立てばと考え、執筆した。特にアジアには、腐敗・汚職に悩む国が少なくない。そこで、1つずつの国を詳細に見ていくには、まず分析の枠組みや幅広い視野と基礎的知識が必要であろう。そのうえで、例えば、中国やインド、タイ、インドネシア、フィリピン

ンなどの腐敗・汚職が経済発展や民主化などにかかる影響を与えるか、何が原因か、そのメカニズムは何か、腐敗や汚職の軽減ないし撲滅は可能か、などについて考える韓国のように、腐敗や汚職がもとで、国民の不満が爆発し、政治不安が起き、経済発展に悪影響が出る可能性も大いにありうるからである。最近では、世界的にも民主主義の後退が指摘されているが、それも元をたどれば、腐敗・汚職が生み出す所得の不平等や貧困、政府のガバナンス、制度などが関わっていることが少なくない。

特に最近では、経済的欲求が民主主義を崩壊させる1つの原因として注目されている。そうした問題は今や非欧米社会ばかりか欧米社会でも問題視されており、改めて民主主義とは何か、その後退を防止する方法はあるのか、ないのか、民主主義を絶対視してきた我々にとって、民主主義に代わる制度は果たして生み出せるのか、などが問われているとも言えよう。

これからの世界はますます激動の時代を迎えると想像されるが、その背景にはグローバル化の影響や様々な経済的・非経済的側面に深く関わっていると考えられる。これは民主主義と同時に、市場至上主義か政府の役割か、といった古くて新しい問題ともかわり、改めて、人間の知恵が試される時代になったともいえよう。

場合、少しでも役立てばこれに越したことはない。世界はまさに激動の時代を迎えているが、その原因の多くは腐敗・汚職の問題と無関係ではない。なぜなら最近のタイや坂田教授の「ニュースの裏を読む」もなかなか面白いテーマを扱っている。筆者が最後に指摘するように、「メディアに問題意識を持ち政府に対する監視機能を果たすように求めることは、残念ながら木に縁りて魚を求めることなのであろうか。」

トランプが大統領に当選して、世界中で権力者とメディアの関係が議論される中で、アメリカのメディアと比較することがいいかどうか疑問もあるが、日本のメディアの資質が大きく問われる事態といえよう。

残念ながら、本研究所は平成29年度をもって終了するつもりであるため、一応、今回の *e-Magazine* が最後になる。終了する最大の理由は後継者が見つからないためである。後を継いで継続したいと考える方がいれば、平成30年度からお願いしたいので、ぜひ名乗り出てほしい。いずれにせよ、今回をもって一応の区切りをつけることになる。長い間、ご支援をいただいた個人・法人会員の皆さんをはじめ、ご協力いただいた執筆者の皆さん、*e-Magazine* を愛読いただいた皆さんに感謝の言葉をささげると同時に、ご健勝をお祈りします。(長谷川)